

## カリブ海の宝石、情熱のキューバクルーズと メキシコ、テオティワカン遺跡

2016年11月26日、成田空港からアエロメキシコ航空の直行便にてメキシコシティへ。到着後、ホテルで1泊した後、翌日から首都メキシコシティとテオティワカンを観光。

メキシコシティでは、世界三大奇跡のマリアとして有名な黒髪で褐色の聖母が祀られるグアダルupes教会を観光。メキシコ料理のランチを堪能した後、4~6世紀に最盛期を迎えたメキシコシティ郊外の巨大遺跡のテオティワカンへ。テオティワカンではジャガーの宮殿、祭儀や生贄の儀式的場所として使われた月のピラミッド、そして世界で三番目に大きい太陽のピラミッドを見学した。



市内に戻ると、北にカテドラル、東に国立宮殿（大統領官邸）、南に連邦区庁舎、西にホテルとそれぞれの方向にある重圧な建物に囲まれた、一辺が200mを超えるほぼ正方形をしているメキシコシティの中心であるソカロ広場を観光。ここにはクリスマスシーズンのふさわしくツリーも飾られていた。

メキシコシティは標高2240mと高く、富士山の五合目と同じくらいの標高。空気が薄く、時折息苦しく感じる。そういえば、今朝、マラソン大会が行われていたが、この標高では走るランナーの苦勞が思い知らされる。



メキシコシティから飛行機で約3時間、カリブ海に浮かぶキューバのハバナへ。

成田出発時に、フィデル・カストロ前国家評議会議長の訃報がニュース速報で報じられるなか、不安を抱えての旅立ちとなった。

メキシコシティ滞在中もカストロ前国家評議会議長の訃報がTVで大きく報じられ、悲しみにくれるキューバ国民の映像と、歓喜に沸く亡命者たちの映像が交錯する中、各国首脳の声明などがニュースで取り上げられました。そして、キューバが9日間喪に服すとの発表があった。まさにこの9日間は今回の私たちのキューバ滞在に滞在する期間に当てはまることを意味していました。

「喪に服す」ということは、キューバの国から陽気なラテンキューバンリズムが消え、アルコールの提供がなくなる。もちろん旅行者に対しても同様。私達は、幸いにもクルーズ旅行なので、船の中ではアルコールや音楽、ショーなどを楽しむことができましたが、ホテルに滞在している観光客は楽しみが半減していたでしょう。しかし、この機会だからこそ、カストロの改革によって生まれたいろいろなものがクローズアップされた、とても興味深く、貴重な体験ができました。

その一つは、車。アメリカとの国交断絶から輸入車が入ってこなくなった結果、古いものを大事に使い、50年も60年も昔の車が現役で走っています。そのアメリカ車がタクシーとして使われていますので、私たちはタクシーに乗りながら、50年代のアメリカにタイムスリップしたようなひと時を過ごすことができました。大きいアメリカ車も今はトヨタのエンジンを乗せ換えて使用され、他国では廃車状態の車でも自分の手で修理してしまう器用な人々を生んでいるのです。



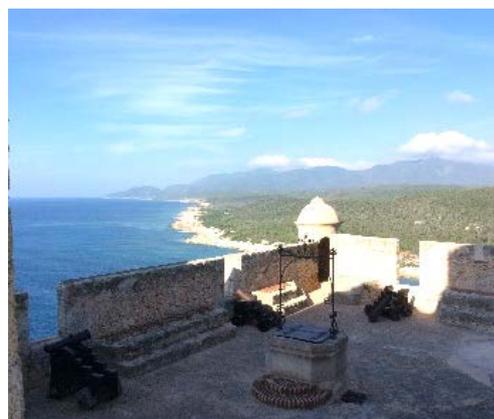
そして、カストロの革命後、学校がたくさんでき、大学まで教育費が無料に。その結果、学力の高い人々を生んでいるようである。また、医療に関してもすべて無料。医者の数も多く、無料で受けられる最先端医療も充実しているとのこと。

そして農業、国交断絶で農業用機械や農薬が入らなくなり、農薬を使用しない栽培の研究がなされ、今や有機栽培の先駆けとして注目されている。いろいろな面で遅れているようなイメージを持たれているキューバだが、学業、医療や農業など最先端の分野もあり、改めて魅力を感じました。

ハバナを出航し、最初の寄港地はシエンフエゴス。ここは1819年にフランスからの移民によって造られた町で、フランスのエッセンスを感じる建物が多い。賭博場として使われていたカフェや邸宅、大聖堂などがホセ・マルティ公園の周りに点在し、中でもトーマス・テリー劇場が印象的でした。木造の三階建てのバルコニー席や舞台の下に水のタンクを置き、声や音を反響させる細工や建設終了時間の4時を示す時計が描かれた天井画など興味深い。バスでマレコン通りをドライブし、ゴルダ岬へ。ゴンダ岬にはフランス、イタリア、アラブなど世界各国の建築家や高価な建材を集めて建築されたパラシワ・デ・バジェと呼ばれる邸宅がある。これはオーストリアの富豪が新妻の為に結婚祝いのプレゼントとして建てたもので、当時の費用で256万ドルかけられている。この街では、車の数は少なく代わりに馬車やバイシャ（バイクに荷台がついている）などが多く市民に利用されている。

船は、キューバの他にジャマイカのモンテゴベイにも寄港。

ジャマイカの北海岸はカリブでも人気のある一大ビーチリゾート地。特に大型リゾートホテルが林立するモンテゴベイは国際空港のあるジャマイカ第二の都市。ここでは、イギリスの植民地時代の1660年代に移民してきたバレット家がサトウキビのプランテーションで財を成したとのこと。今回は、1790年に建てた舞踏会用のグリーンウッドグレートハウスを見学した。また、ファルマウスではメインスクエアで15分ほど果物スタンドやスーパーをのぞいて、ジャマイカの市民の生活を垣間見た。



船に戻り、希望者を街のレストランへご案内。ジャマイカ名物のジャークチキンやオックステールの煮込みなどにお赤飯に似たご飯の付け合わせただけの、パラパラなご飯でしたが日本人の皆様の方に合う物が食べられて、一安心。

その後、近くの土産屋で買い物。値段交渉の駆け引きで手に入れたレゲエの帽子やTシャツ、キューバでは品不足で思うように買い物できなかった、買い物欲がここで爆発！ドルが使えてさらに満足のショッピングタイムでした。



船はキューバに戻り、最後の寄港地サンチャゴデクーバへ。ここでは、翌日の12月4日にカストロがこの街にある墓地に埋葬されるとのこと。本日、遺灰がキューバ各地を巡り到着することになり、それに伴い、街では交通規制が引かれることになり、観光も早朝出発で郊外のモロ要塞に行くことに。

モロ要塞は海賊の襲撃を防ぐために1500年代に基礎が築かれ、1643年にイタリア人設計者によって要塞として完成。その後、増築、半壊の歴史を経て現在の姿に修復された。武器庫や礼拝堂、宿舎、牢獄などがあり、最上階からはカリブ海と美しい半島の風景を

堪能。ここは1997年にユネスコの世界遺産に登録されている。

忘れてはならないのは、この街が革命の出発地点であること。革命は1953年、カストロがこの街のモンカダ兵営を襲撃したことがその発端になった。これは失敗に終わり、彼はメキシコに亡命をすることになるが、その後、1956年にグランマ号でメキシコから再度挑戦をかけるために乗りつけたのが、このサンチャゴ近郊の海岸だった。残念ながら、交通規制によりカストロが埋葬されることになるサンタ・イフィヘニア墓地やモンカダ兵営博物館などを見ることはできなかった。

この船、セレスティアル・クリスタル号は2万5千トンほどの小さな船だが、ショーの内容が濃く、毎日、夕食後の最大の楽しみとなっていた。今回は乗客数が少ないようで、1回公演となっていたが、2回公演で毎日出演では体力がもつのかな？と心配になるほど素晴らしい歌と踊り、アクロバットのショーを繰り広げてくれた。喪中のキューバ国内では、その独特なリズムを聞くことが出来なかったため、船外でのキューバらしい催し物に、救われた感ありました。食事も意外(?)と口に合い、普通に食べることができました。

日本から持参した、うどんやそうめんの和食を料理して欲しいと、というリクエストやレストランへの持ち込みにも気安く受けてくれたことは、感謝しております。

そして、下船日を迎える。この日はバスの迎えが11時30分だったので、早めに下船し、荷物を預け、時間まで街を散策することに。

12月5日でカストロが亡くなってから10日目で喪が明けて、街には賑わいが戻り始めていた。街を歩いているとどこからとなく聞こえてくるリズム、路上演奏だったり、建物内で行われているダンス教室だったり、そしてヘミングウェイが通ったバー「ラ・ボデギータ・デル・メディオ」からもライブバンドの軽快なリズムが聞こえてくる。これが本来のキューバなのだと実感。



町から、キューバ名物クラシックカーのタクシーに乗り、港へ戻り、そこからバスに乗り換え空港へ。

途中、カストロの葬儀式典が行われていた革命広場へ。ここはカストロの演説の場として知られ多い時には数十万人もの人が広場を埋め尽くした場所。広場の周りにはチェ・ゲバラの大きな顔のモニュメントがついている内務省、カミーロ・シエンフエゴスの顔の情報通信省、109mの星形の塔のホセ・マルティ記念博物館など独立にかかわった人物のモニュメント。カストロの死後、彼のモニュメントもできるのかとガイドにたずねると、「カストロは遺言で、自身の思いは国民の心に残っているから銅像や記念塔などを立てることを禁じた」と熱く語った。キューバの国民から慕われるカストロ像とキューバから亡命した人々にとってのカストロ像の温度差は激しい、そんな思いの中ガイドの話に耳を傾けた。



最後にこの革命広場でキューバ観光が終わりとなるが、フィデル・カストロのご冥福と、他国と経済、文化交流が進んでも、キューバらしさをいつまでも残してほしいと願いながら、カリブ海の宝石「キューバ」を後にした。